

《手話とエスペラント》 北海道エスペラント連盟は、言語的少数者の権利を擁護する立場から日本手話をテーマに取り上げてきました。このインタビュー記事はその一環です。詳細は連盟ホームページの掲載情報をご覧ください。

インタビュー連載 第1回

聾者が聾者だと見間違えるほど、自然な日本手話を習得し使用するガブリエルゴンサレスさん。聞こえるひとで、ここまで高度に日本手話を操るひとは、日本人の中でも見たことがありません。日本語も非常に流暢な上に、他にもいくつもの言語を操る多言語話者です。アメリカで生まれ育ったガブリエルさんは、一体どのように日本手話と出会い、向き合ってきたのでしょうか。また気になる日本手話の勉強法とは。



ガブリエル ゴンサレスさん(26歳)

1998年アメリカ合衆国イリノイ州出身。メキシコ移民の両親のもとに生まれ育つ。英語、スペイン語、フランス語、日本語、日本手話等を使用する多言語話者。イリノイ大学を卒業後、JETプログラム（外国青年招致事業）で来日し、旭川市の国際交流事業に従事。現在はLGBTQ+と言語政策について研究中。2025年4月北海道大学大学院国際

広報メディア・観光学院の修士課程に入学予定。

日 時：2025年1月13日 13:15～16:00 頃

場 所：北大マルシェ

インタビュアー：波田地 利子

同 席：朝野 未沙稀（手話学習聴者）

撮 影：曲 文琛

使用言語：日本語

【用語解説】

・聾（ろう）者 … 聞こえない人

・聴者 … 聞こえる人

・日本手話 … 日本固有の手話言語。日本語とは文法が異なる。手の動き以外にも表情や体の使い方などさまざまな文法がある。

・日本語対応手話 … 日本語の語順に手話単語をあてはめて表現したもの。日本語を高度に習得していない聾者には理解が難しい。

— ガブリエルさんはアメリカのどちらのご出身ですか？

ガブリエル（以下、ガ）： 私はイリノイ州にあるレイクヴィラという小さな村で生まれ育ちました。シカゴから車で一時間くらいのところですよ。北海道はイリノイに少し似ています。平地で、草原が風に揺れてるのがすごく綺麗なんです。両親は仕事のためにメキシコから移住した移民です。母はスクールバスの運転手、父はタイル施工の自営業をしています。ITの仕事をしている2歳年上の兄がいます。言語が好きになったのは兄の影響が大きいです。エスペラントは、兄がやっていたので実は少しやったことがあります。

— 地域の中で、マイノリティとしての出自をお持ちだったんですね。

スペイン語を話せないことを「恥」と感じていた

ガ： 家庭で両親のスペイン語を聞いて育ったのですが、私は彼らのようにスペイン語を話しません。レイクヴィラはほとんどが「白人」（非ラテン系ヨーロッパルーツの人々）ですが、近隣にはメキシコ系アメリカ人が集まっている地域があり、両親はよくそこを訪れていました。他のメキシコ系アメリカ人の子どもたちはスペイン語ペラペラで、自分のルーツの文化とのつながりが強く、誇りに思っています。そのなかで私は、スペイ

ン語が話せないことをすごく恥ずかしいと感じていました。それはトラウマと言ってもいいくらい、私の中に深く内面化されています。

— スペイン語コミュニティにいるときに辛さを感じますか？

ガ： やはりマジョリティの英語話者コミュニティにいと、残念ながらすごく楽なんですよね。家庭では、いまは両親がスペイン語ではなしかけて私は英語で答えるということができる関係性が作られて楽です。しかし家族と一緒にスペイン語話者のコミュニティに行くときは、やはり不安になります。だから高校で第二言語選択のとき、スペイン語は選ばなかったんです。代わりにフランス語を選びました。先に兄が勉強していた影響です。それがすごく習得しやすくて。「言語ってこんなにも面白いものなんだ！」と初めて感じました。なのでフランス語の教師を目指しました。イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校に入学して、言語学とフランス語学の二つの学位を修めました。パリに留学しましたが、ちょうどコロナ禍が始まり途中で帰国せざるを得なくなりました。そこで大学卒業後、JETプログラムで北海道に来ました。

— 日本語はいつ学習を始めたんですか？

ガ： 私が17歳のとき、兄が日系スーパーマーケットでGenkiという教科書を買って与えてくれたんです。それとYoutubeを使って独学しました。フランス語ができたんだから、日本語もできるんじゃないかなと。兄は日本の文化が大好きでした。私もコミックスが好きで、たとえば「セーラームーン」や「ハム太郎」が好きでした。でもそれが日本のものだという事は知らなかったんです。6歳のとき、兄から「それは日本のものだよ」と教えてもらい驚きました。兄は「セーラーヴィーナス」の日本語での書き方を教えてくれました。だから実は、日本語学習を始める前にひらがなは書けたんです（笑）

— 他にはどんな言語を学んだことがありますか？

ガ： ポルトガル語、イタリア語、ヘブライ語、中国語、アイヌ語、ラコタ語（ネイティブアメリカンのラコタ族の言語）、ベトナム語、タイ語。それからアメリカ手話。中学生の頃、友達から読唇術でコミュニケーションがとれる難聴者がいることを聞いて、また映画やテレビドラマでの聾者の表象を見て、聾文化に興味は持っていたんです。高校のときも手話通訳者への憧れがあったんですが、その時にはフランス語の教師になると決めていたので。学習のきっかけは、大学を卒業する直前の学期で、いつも人気がありすぎて受けられないアメリカ手話の授業の抽選に当たったんです。そこで学びました。大学卒業後、日本に仕事のために転居するときに、アメリカ手話はもちろん日本では通じないと思った

ので、インターネットで検索をしたら日本手話という言葉もあるんだ、と。というわけで、アメリカにいる間にもう日本手話の勉強を始めていました。

— 来日前に日本手話を学んでいたんですか！アメリカの聾コミュニティとの接点がありましたか？

ガ： アメリカでは接点はありませんでした。一人だけ聾者の知り合いがいて、彼女は中国から来たひとでしたが、大学で清掃員をやっていました。僕は大学の食堂で働いていたので、はなしかけました。ただ彼女はアメリカ手話は使わなかったなので、筆談でした。



文化的背景の壁

— アメリカ手話と日本手話は、やはり全然違うんですよね？

ガ： 言語学的な視点からみると、手話言語の文法としてはすごく似ています。たとえば「話題化」という技法があります。日本語で「誰がりんごを食べましたか」と言うとき、「りんご【は】誰が食べましたか」と言うことで、目的語の「りんご」を話題として強調できますよね。同じことを、表情などを使って手話でも表現できます。これが「話題化」ですが、アメリカ手話にも日本手話にもあります。ただ単語は、文化の影響が強いですよ

ね。日本の文化に育っていなかったら、100%はわからない。そういう壁があると思っています。たとえば札幌に住んでいるなら、この地名手話がわかりますよね。

(手話表現) /豊か/平ら/ク/

とよひら

— 豊平区ですか？

ガ： 正解です。これは漢字を知らなかったらわからない。何が、ゆたか？たいら？って。実は同じようなことが先日、旭川の手話サークルの新年会に参加したときもありました。伝言ゲームをしたんですが、お正月の食べ物の「うま煮」が出題されたんです。それが私はわからなくて。言語としては理解できるけど、内容がわからない。それで私の後がめちゃくちゃになってしまったんです。

— ああ、それはわかりませんね……。エスペラントで海外のひとと話すとき、言語は同じなはずなのに、生まれ育った文化背景が全く異なるためコミュニケーションがしづらいつ感じます。それと比較すると、日本手話は私には難しい言語ですが、相手の聾者は日本社会に生きていて同じ文化を共有しているので、日本人の私にとってはエスペラントで海外の人と話すよりも通じやすいと感じる時があります。

声付き手話でいいのか

— どうしてもマジョリティ側である聴こえる日本人は、コミュニケーションのあり方に無自覚なところが出てしまう場面がありますよね。最近もサークルで、聴者が手話を使わずに声で雑談しているのを見た聾者が怒った出来事がありました。

ガ： その問題は、北海道だけでなく全国的に起きていますね。

朝野（以下、朝）： 私も最近そのことを考えていて。私のサークルでは皆声をつけて喋るんですよ。聾者のサークル員は「来てくれるほうが大事だから、それでもいいよ」って言うってくれるんですけど。でも正直、（手話ではなく）唇を読み取っているって言っていました。

ガ： 日本手話の場合は、口の形が言語的に要素として大事ですからね。でも、「だから日本語の順番に沿って表現すればいい」とはならないですよ。

朝：　すごく難しい。聾のひとはもうそれが普通というか、我慢しているとまではいかないかもしれないけれど。聴者はそれで楽しくコミュニケーションをとっているけれど。私も本当は声なし手話でやりたいて言いたいけど、難しいです。

ガ：　聾者が聴者に合わせている。でも本当に正しいのは、逆ですよ。聾者も一人一人コミュニケーションツールもさまざまですから、相手に合わせるのが必要です。筆談だったら筆談。日本語対应手話か、日本手話か、どちらでもいいけれど、相手が求めているコミュニケーションを考えないといけない。「これでいいんじゃない？」「なんとなく伝わってたらいいんじゃない？」というのは、自己中心的な態度ですよ。

朝：　聾者がわかってくれるからいい、では、だめですよ。

—　ろう者が頑張って読み取ってくれているってことに、聴者が気づいていない場合もあるわけじゃないですか。コミュニケーションだからどっちかが100%でどっちかが0%っていうことは絶対なくて、どちらも歩み寄りが必要だけど、かなり聾者側に負担がかかっているな、っていうのは気づかないといけないなと思います。

ガ：　これはちょっと説明しにくいんですけど、その聾者が聴者にどの程度合わせているかで、相手の聴者に対する評価がわかるんですよ。例えば自分はいつも必ず声なしで手話表現をするんです。なのでよく初めて会う聾者に、聾者だと思われることがあります。「え、あ、聞こえるんだ？」って。そのあとまた聞こえることを忘れられて「あ、そういえば聞こえるんだっけ？」って言われます（笑）

—　ガブリエルさんと話しているときは、聾者がノーストレスで話せてるってことですよ。

ガ：　自分と話しているときは声なしで手話をしている聾者が、他の聴者には声付きで手話をしていて。これは無意識で切り替えられていて、本人も気づいていないと思うんです。聴者が「これぐらいでいいよ」って思っているから、聴者が合わせることを忘れちゃう。ろう社会の中でも、聾者側が合わせよう合わせようってなることは、悲しいですよ。